
持続性心房細動に対するカテーテルアブレーションにより 著明な心機能改善を認めた一例

田中 友望、吉田 雅晴、山城 荒平
(愛仁会高槻病院 不整脈内科)

症例は 40 歳代男性。

X-2 年に健診で上室性期外収縮を指摘され、年に一度の経過観察としていたが、X-1 年 7 月の健診で心房細動を認められた。軽度労作時倦怠感も出現しており、近医にて抗凝固療法が開始となり、フレカイニドやピルシカイニド、アミオダロン等の抗不整脈薬による薬物的除細動が試みられた。しかし心房細動が持続するため、当院に加療目的に紹介となった。当院紹介時、心電図検査で心拍数 118 回/分の頻脈性心房細動を認め、経胸壁超音波検査では左室駆出率(EF)19.6%と著明に左室機能が低下していた。また NT-pBNP 655ng/L と上昇しており、症候性の持続性心房細動として、X 年 3 月にカテーテルアブレーションを施行した。拡大肺静脈隔離術に加えて、心房細動のトリガーとなりうる内因性自律神経節(GP : ganglionated plexus)に対する心筋焼灼を行った。

術約一ヶ月後も洞調律を維持しており、EF 改善や NT-pBNP 低下を認め、自覚症状も消失した。またその後も心房細動の再発を認めず、心機能低下なく経過している。上記の経過より頻脈誘発性心筋症と診断した 1 例を経験したため、文献的考察も含め報告する。